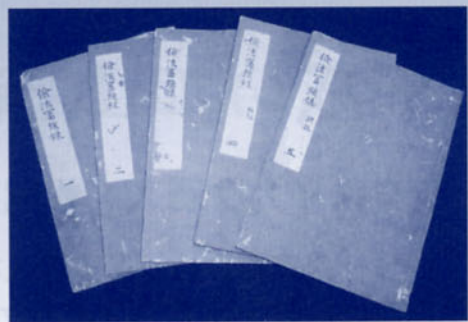




歴史に学ぶ 江戸の教育者・ 正司考祺



「儉法富強録」全5巻

江戸末期より明治初期にかけて、有田では8代深川栄左衛門をはじめ深川忠次など窯業界で活躍された素晴らしい方々がいますが、教育界でも正司考祺・谷口藍田・江越礼太など先駆者がいます。今回は正司考祺翁につき紹介いたしましょう。

正司考祺旧宅は有田中学校の山手にあります。考祺は寛政5年(1793)の生まれで、呼び名を碩溪と言っていました。呼び名は猿川の溪流から名付けられたと言われています。考祺は読書を好み、伝記を始め中国の古典に通じておりました。

文政11年(1828)有田大火の折には私財を投げ出し救済に当たっています。当時は有田千軒と言ひ、焼け残ったのは岩谷川内40軒、白川100軒、泉山10軒といわれています。

考祺は、天保2年(1831)「経済問答秘録」30巻を著していますが、この中で「経国済民」(国を經營し、治め、民を助け救う)にはどうすればよいか、そして教育の大切さを説いています。家庭にあつては親子相争い、嫁と姑が旨くゆかないと嘆いています。

翌天保3年(1832)に「儉法富強録」を著しました。この中で鍋島藩が財政に苦しみ、借金までしてやりくりをしている。これを救うためには藩そのものがムダを廃止し、節約をし、特産品を創り出して経済力をつけないといけないと説いています。

そして住民は、気のついたことは、どんどん意見具

申をし、皆んなで藩の立直しをしないといけないと説いております。

これを現在の日本に当てはめると共通しているところが多くあります。

現在、日本の税収は年間42兆円、国債の年間発行額40兆円、合計82兆で、財政を賄っています。

一方、国債、地方債の借金が939兆円、それに特殊法人の不良債権100兆円を加えますと1000兆円の借金、それに国債などの利子支払が年間21兆円あります。

先述の私達が支払う税金が42兆円でしたから、その半分の21兆円が借金の利子として支払っているのです。

余りにも数字が大きすぎるので、国民1人当りに換算してみましょう。

年収420万円(月35万円)の人が、400万円の借金をして、820万円(月68万円)の生活をしている。この借金がつもりつもって1億円になり、その借金の利子として210万円(月175千円)を支払っている計算となります。

今から170年程前に、考祺が藩の財政窮乏のとき建白したときと同じような状態が、現在もあつているのです。考祺は、あの世で嘆いていることでしょう。

考祺は安政4年(1857)に65才で亡くなりますが、間もなく没後150年となります。先人の教えを、いま一度ひもとくことも大切ではないかと思う次第です。

(久富 桃太郎)



正司考祺については、有田町史・政治・社会編1、通史編のほか、福岡博氏「佐賀・幕末・明治500人」(佐賀新聞社刊)。秀村選三氏「近世後期の経済思想家・正司考祺著『儉法富強録』」。松本源次氏「炎の里・有田の歴史物語」。中島浩氣「肥前陶磁史考」で紹介されています。

季刊 皿山 2005 春 No.65

有田町歴史民俗資料館・館報

平成の皿山職人像

ワクスイカケ職人・松尾政雄さん

シリーズで紹介している職人さんですが、第四回は釉薬かけ(ワクスイカケ)職人の松尾政雄さん(57)です。



ワクスイカケの作業をする金武賢治さん(左)と満上尚良さん(右)

成形された素地に本焼き焼成前に釉薬を施す作業を施釉せゆうといいます。有田では「ワクスイカケ」、釉薬のことを上薬(ワクスイ)ともいいます。

有田町南川原山にある柿右衛門窯は、江戸時代から続く窯で昭和46年に柿右衛門製陶技術保存会として「濁手にごして」の技法が重要無形文化財の総合指定を受けました。さらに平成13年には当主の十四代酒井田柿右衛門さんが重要無形文化財、いわゆる人間国宝に指定されました。



松尾政雄さん

松尾政雄さんは柿右衛門窯で30年以上の経験を持つ職人さんです。仕上げを担当し、ワクスイカケと窯焚きを受け持っていますが、まずその仕事は釉薬を作る作業から始まります。作り方は次の通りです。

- ① 泉山、白川の陶石を細かく砕いたものをよく水すい簸ひして、上澄みを大きな甕かめの中でねかせる。
- ② 宮崎県から購入している柞くわの樹皮を焼いて作った

灰を大きな甕に入れて、水と一緒にかき混ぜて粗漉しして砂などの不純物を取り除く。その後乾燥させて、さらに一ヶ月ほどねかして本漉しする。この間2、3日に1回水を取り替える。

- ③ 泥しよう状態の①と②を桶、または甕にとり、これに素焼きの破片を同時に一呼吸する間浸し、付着した液の厚みを切断して、その厚みが同一かどうかで濃度が同じになったかどうかを調べる。これを「切り合わせ」といい、その後*チョツパゲを使って配合する。①を10杯に対し②を2杯加えたものを2杯釉、同じく②を3杯加えたものを3杯釉といい、前者は窯室内の温度の高い所に入れる製品に使い、後者は低い所に使う。

釉薬の掛け方は製品によって異なります。小さな皿や碗、盃などは一度だけ掛けますが、袋物(壺、徳利など)は内側を掛けてから外側をもう一度掛けます。また、高台脇や折り返しの部分などは釉薬がたまりやすいので釉薬をかける直前に、水をしみこませます。

柿右衛門窯の代表的な製品である「濁手」の場合はより薄く掛けるため、他の一般の製品以上に困難を伴います。松尾さんは「同じ原料を使っているはずなのに、釉薬を作るたびにその出来上がりが微妙に異なる。また、焼成後の出来が予想に反するなど、数字や言葉では伝わらない難しさがある。」といいます。

現在、仕上げを担当しているのは4人で、松尾さんのもとに若い世代が続きます。伝統の技を次世代につないでいく難しさはどんな仕事にもあるものと思いますが、松尾さん自身も先輩の職人さんの仕事を見て、言葉では表現されない部分を長い時間をかけて身に付けてきたといいます。

ただ、技は伝わっても原料を昔のものと同じ形で入手することが次第に難しくなっています。松尾さんも陶石が違っていたのに気付かず、焼きあがって初めてその発色がまるで違っていたことがあったそうです。

柿右衛門窯では4、5年前から、近くの山で柞くわの木の植林を始めました。今の世代では無理だが、次の、その又次の世代の時、それが役立つだろうということです。伝統の技を伝えるということは、職人さんを育てることは勿論、その原料も確保しなければならないところに難しさがありますが、ここでは確実に伝統が受け継がれています。

※水簸(すいひ)

陶石を砕いて粉にしたものに水を加えてかきまぜ、粗な部分が沈殿してから、上水をくみ取って他の溜めに移して水漉しをする作業をいう。

※チョツパゲ

元々大瓢を2つに割ったもので、水をすくう道具。現在、材質は異なるが名称が残っている。

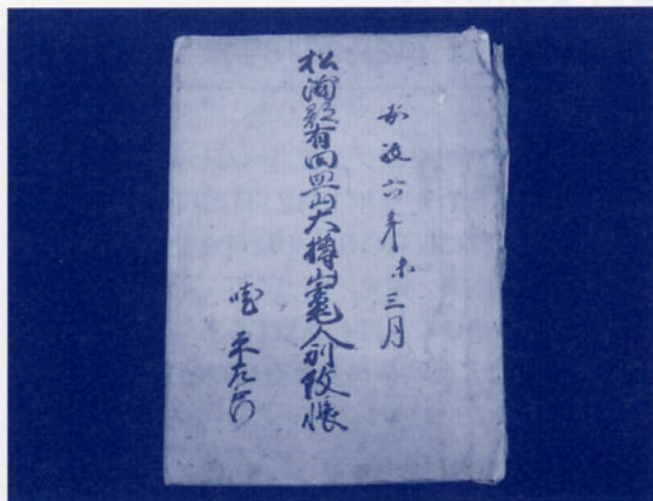
新発見！

有田皿山初の

「竈人別改帳」

かまどにんべつあらためちよう

昨年末、白川にあった久保時太郎家の資料が子孫である東京在住の^{ぎょうぶ}刑部久子さんから当館へ寄贈されました。久保家は江戸時代から続いた窯焼きの家で、漆椀や折敷などの生活用具と共に古文書など千点を越す資料のなかに大変貴重な文書がありました。表紙には、「安政六年（1859）未三月 ^{まつうらぐんあり た さらやまおだるやまかまど}松浦郡有田皿山大樽山竈人別改帳 咄 平左衛門」と書かれています。

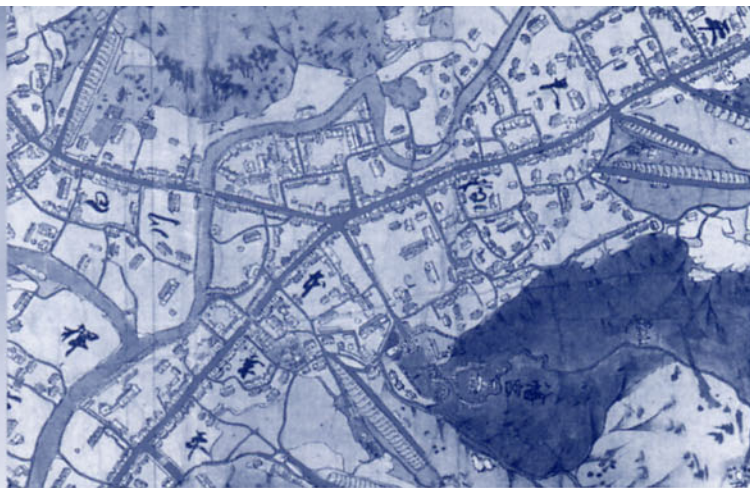


「竈人別改帳」の表紙

元来「竈（かまど）」とは、土・石・煉瓦・鉄またはコンクリートなどで築き、その上に鍋・釜などをかけその下で火を焚き煮炊きするようにした設備のことで、かま、くど、へつついなどともいいます。住居には必要な施設であり、独立の家族生活をする一家、その戸数割りなどの賦課（税金の割当）の単位などにも使われ、一軒の家の世帯を意味するものです。

佐賀県内ではほぼ同じころに書かれた嘉永7年（1854）の「佐賀城下町竈帳」があります。この竈帳は佐賀城下の下級武士と町人が同じ町内に生活し、同じ職種の商工業を営んで生計を立てている姿をいきいきと伝えています（「佐賀城下町竈帳」三好不二雄・三好嘉子編）。

今回、有田皿山で初めて発見された「竈人別帳」には1ページの上部に^{きよ}帰依寺の宗旨、寺名と所在地が書



「安政六年松浦郡有田郷図」の大樽地区（佐賀県立図書館蔵）

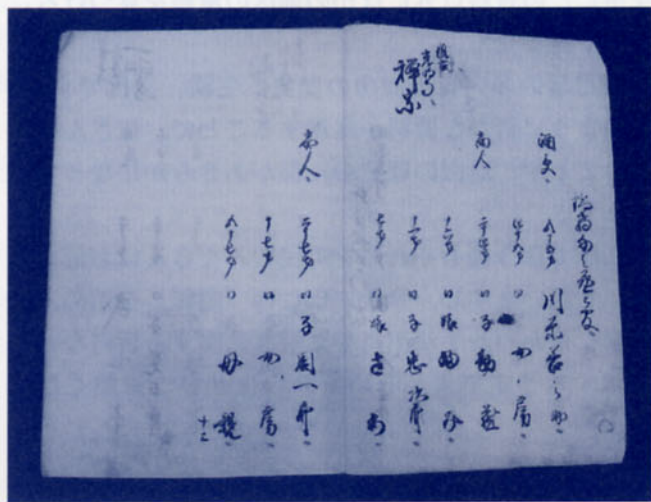
かれています。下部には士分格の家は誰々の「家来、中小姓、被官」などの身分が竈主（戸主）の名前の右側に書かれ、その上に職業が記されて、左側に竈の構成員の続柄と年齢が女房、子、娘、母親などの順で記載されています。当時の習慣だったので、男性は大人も子供もきちんと名前が記されていますが、女性の場合、娘には名前が記されているものの女房や母親には名前がありません。

佐賀城下町の竈帳と異なるところは、家の敷地面積が記されていない点で、他はほぼ同じような事柄が書かれています。

大樽山の5竈内外を1組の単位としてまとめていますが、この当時の大樽山の人口は男女514人、内訳は男276人、女238人となっています。職業もさまざまで窯焼き20人、絵書き職54人、細工職41人、荷師2人など。これらの職業は焼物産業に直接関わっていますが、ほかにも染屋、大工、石工、鋳掛屋、医師、商人、按摩などの職業を持つ人々がいて、往時の皿山の暮らしぶりが伝わってきます。

帰依寺は有田皿山内の寺だけでなく、近隣の伊万里、武雄、山内など広範囲にわたります。

一世帯の構成は、例えば酒請（酒造販売業）を営む鍋嶋千之丞被官の川原善之助さん一家を見ると当主善



「竈人別改帳」の内部

之助（55歳）、女房（45歳）、商人である子勘藏（24歳）、娘ふみ（16歳）、子忠次郎（11歳）、娘さわ（7歳）と続き、子（おそらく長男）周一郎（27歳）は商人、女房（17歳）、母親（57歳）が同居する9人家族です。帰依寺は芦原・光明寺（禅宗）で、川原家は芦原（現在の北方町）から移住して来たために帰依寺は出身地にあるものと思われます。

子供に忠次郎という少年がいますが、彼は後の明治6年、ウィーン万国博覧会へ有田から初の海外渡航を行い、西洋の製陶地から日本へ最新技術を持ち帰った人として歴史にその名を残しています。

このほか、おそらく夫が先に亡くなったのでしょう。「安芸殿中小姓・窯焼き職百武幸十後家（58歳）、娘とら（19歳）」の二人だけの家族には跡継ぎの男子がおらず、朱で後書きされた文章には「泉山重右衛門子米太郎入婿に付き入れ方之事」とあります。夫亡き後に婿を迎えて、なんとか窯焼き職を続けていったのではないかと推測されます。

当時の大樽山には125の竈がありました。一人暮らしの家、父親は窯焼きを営み息子が細工人である家やその逆だったり、佐賀城下へ奉公にいつている家族を持つ家などさまざまです。このほかにも全部で135ページの中に多くの情報を含んでいる「竈帳」ですが、これは大樽山だけのものです。本来であれば皿山の各地区でも作成されたはずなので、どこかに眠っているのかもしれませんが。

当初、なぜ大樽山の「竈帳」が白川地区の久保家に伝わったのかわかりませんでした。その後の調査で、表紙にあった「咄 平左衛門」が柳ヶ瀬平左衛門であること、久保家の先祖に柳ヶ瀬家から嫁ぎ両家は親類であったことから、大樽の竈帳が白川の久保家に伝世したことが推測できました。この「咄」という役は今で言う区長のような役割をする人です。しかし、残念な事にこの資料以外にほかの地区の竈帳を見つけることができません。

まだ謎の多い有田皿山の歴史、生活、文化ですが、このように新たな資料が出現することで、皆さんの先祖のことや、皿山の歴史の一部があきらかになっていきます。

当館では今後もそれらを町民のみなさんにお伝えしたいと思っておりますし、今秋にはこの「竈帳」を始め、久保家に伝わった生活用具や窯焼きに関する資料などを展示する予定です。その折りにはぜひご来館ください。



「平成の歴史を創る」

平成8年7月に「燃えて未来」のテーマで世界焔博が当地で開催されて、そろそろ10年になろうとしています。そのとき町内の商店主が中心になって地区毎に通りの名称（例えば、とんばい堀通り）をつけ町全体を元気あるものにしようと『べんじゃら祭り実行委員会』（会長・犬塚光夫）が組織されました。

“べんじゃら”とは、皆さんもご存知のとおり陶磁器の破片のことで、古窯跡から出てきた紅皿から名付けられ、子供達の遊び道具でした。

「べんじゃら祭り実行委員会」、春・夏・秋の各委員会、新商品開発委員会などがあり、事業としてレンタルサイクルがあります。毎月第1火曜日に会合がっており、参加自由です。

申込は（42）2018手塚宅へ。

もう一つ、情報交流プラザ『べんじゃら広場』（理事長・深川祐次）が今年1月21日に役場前に開設されました。3月にNPO法人の認可を受ける見通しです。これも「窯業／観光／人づくり・町づくり」という観点から事業に取り組もうとするもので、去年は陶器市に役場で大型映像により有田の紹介をされました。事業としてレンタルスペース・パソコンがあります。

お問い合わせは（41）1517佐々木まで。

これまでも有田の窯業界がどん底にあるとき、中堅層の人たちが集まり、長いトンネルの中を試行錯誤しながら、先方より射し込む光を求めて進んでゆき、そして消費者のニーズにあった作品で世に問うことができました。これらのグループが「燃える集団」として成功を願わずにはいられません。（久富 桃太郎）

季刊『皿山』

通巻65号（平成17年3月1日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185